

木の学び - 80年使える机・椅子を考える -



女子部の生活を考えるとき、「木」は、欠かせない存在であると言える。例えば、昼食の炊飯に使用する釜戸の薪は、キャンパス内に育成している木樹の枯れ枝や、学園内の木工作業で出た廃材である。10万坪のキャンパスには4000本もの樹木が生育し、それらの樹木は春になれば桜の花が咲き、夏には緑がもえ、秋には美しい紅葉、冬は真白に染まる。このような自然に恵まれたキャンパスの中で、見事に調和する木造校舎で私たちは毎日を過ごし、木製の机と椅子で勉強している。これまで教室で使用してきた机や椅子は、古いもので80年経っており

老朽化が著しく、使用する生徒の身体も発達し、椅子・机について再考する必要性が出てきた。しかし、古くなったからといってすぐに買い換えるのではなく、生徒たち自身でこの自然に恵まれた学園で使用する机と椅子、また勉強するためにふさわしい家具を考えるプロジェクトチームを作って話し合ってきた。そして、買い換える際には、机と椅子の製造過程を知り、使われている木材の背景までを追って、この机と椅子の更新が環境や社会に与える影響を調べ、次の更新がくる時までに私たちに何が出来るのかを考える。



【STAGE1】空間との調和・デザインを考える

●老朽化を出発点に、これまでの歴史を振り返る。

当時高等科3年生だった女子部94回生の学年から机と椅子の係が出され、これまでの机と椅子の歴史を調査し、現状の状態を全て把握してデータにまとめた。そして、㈱スタンダードトレード社に協力を得て、現在使用している椅子の手入れの方法や構造について、代表の渡邊氏から話を伺った。また、行事などでの使用方法も見直し、新しく買い替える机と椅子の扱い方や、メンテナンスマニュアルを作成することを提案した。



2012年

●2人掛けから1人用に。サイズの調査。仕様の模索。

2015年から女子部97回生の生徒へ係が引き継がれ、新しい机の検討を行った。これまで2人用の長い机から、教室の使い方を考えて1人用に見直し、生徒の身長を学年別にグラフ化することで、平均値や中央値を求め、最も適している高さを3タイプに分けた。脇箱付きや、天板が開閉する仕様など、いくつかのデザインが考案され、試作を検証した結果、天板は固定式とし、棚の中に各自トレーを入れて引き出しとして使用することに決まった。



2015年

【STAGE2】新しい家具の製造・材料の背景を追う

●国産の広葉樹材を活かした家具へ

これまで検討されてきた新しい机と椅子を実際に製造する段階へと進み、その材料に国産木材を利用することで日本と世界の森林に目を向けたいと提案されたことから、全ての木材を出処の森林まで明確な国産の広葉樹材を選択した。また、その国産広葉樹を活かして家具を製造できる業者を探し、㈱ウォールデンウッズ吉川氏に依頼することになった。吉川氏のコーディネートにより、椅子は高山市の協力会社にて製造され、机の組み立てを学園の木工教室で行い、製造現場を生徒が見学した。



●“ものづくりで森づくりネットワーク”と連携

岐阜県郡上市で広葉樹人工林の造林に取り組む団体から、机の材料の一部、主に天板の材料として、数種類の広葉樹材を提供していただいた。そして、その森林に足を踏み入れ、広葉樹を択伐する現場を生徒が視察し、搬出から製材・乾燥・加工までの工程を追うことができた。また、椅子の材料もどのような森林から出てきたのか、日本の一般的な広葉樹林の伐採現場も案内していただき、机と椅子を更新することが森林にどのような影響を及ぼすのか知るきっかけとなった。



2016年

●ヒノキのトレーを製作

新しい机の引き出し用として、A4サイズのトレーを木工の授業で製作する。使用する木材は、中等科3年生の時に見学に行っている速水林業㈱のFSC認証ヒノキ材を用いている。この授業では、製作後に日本と世界の森林の現状と課題や、国産広葉樹を利用した女子部の机と椅子についても学び、係の生徒だけではなく、多くの生徒がこの取り組みについて理解を深められるような機会としている。将来、木製品を購入する時に、自分たちがどのような選択をするべきか、考えられるようになることを目指す。



●森林に命を返す・苗の育成

ものづくりで森づくりネットワークから実生苗の育成を提案され、机のために択伐した森林に苗木を返すことを目指していく。苗はポットに入れ替え、学校に持ち帰ってある程度育てる予定である。樹という命をいただいて家具に変え、次の命を自分たちの手で森林にしていくことで、循環とサステナブルな学びを展開していく。



2019年

